

Спеціальне інтерв'ю
スペシャルインタビュー

特別
企画

ウクライナ人医師の チャレンジ

～日本の医師国家試験に合格した外国人女医～



▶黒海の北に広がる肥沃な大地、ウクライナ。赤いビーツを使ったボルシチは、オスタペンコ医師も得意とするウクライナの郷土料理だ。

▶ウクライナ東部、ドニプロ河岸に広がる美しい都市、ドニプロペトロウシク。今も昔も軍事・宇宙産業の中心地で、旧ソ連時代は外国人は立入禁止だった。

ウクライナ

黒海

プロフィール

- 1988年 ドニプロペトロウシク医科大学首席卒業
- 1992年 ソビエト連邦国立癌センター大学院修了
放射線医学博士号取得
ドニプロペトロウシク医科大学講師
- 1993年 来日、癌治療の研究に従事
- 1999年 民間病院でハイパーサーミアの臨床に携わる
- 2011年 第105回 日本医師国家試験合格、
東大病院で初期研修医となる
- 2013年 東大病院消化器内科後期研修医となる
- 2016年 後期研修修了

バレンティナ・オスタペンコ
Valentina Ostapenko

バレンティナ・オスタペンコ医師（50）は東京都東大和市にある東大病院での後期研修をこの春終えたばかり。ウクライナ出身で在日24年目、29歳の息子をもつ彼女は、同病院で消化器内科医としての人生を歩み始めた。ウクライナで医師免許を取り、45歳で日本の医師国家試験にも合格したオスタペンコ医師の一大チャレンジについて話を伺った。

弱い人を守りたい

時はソビエト連邦時代。ソ連の構成国であったウクライナの東部、ドニプロペトロウシク市で生まれ、子供の頃から「弱い人を守りたい」という気持ちをもっていたオスタペンコ医師。学生結婚し、子育てをしながら休学することなく大学を首席で卒業した。モスクワのソビエト連邦国立癌センター大学院（当時）に進学し、博士号を取得。大学院修了から

1年後の1993年、関西医科大学との共同研究のために半年の予定で来日した。放射線治療やハイパーサーミア（温熱療法）の研究を続ける中で、日本滞在が1年を過ぎた頃、当時5歳の息子を日本に呼び寄せた。

来日から6年。ワシントン癌センターへの留学の話が決まりつつあったちょうどその時、ハイパーサーミアの説明に訪れた大阪府貝塚市の西出病院で、ある60代の乳癌患者さんと出会った。「先生、どう



か私の治療をしてください」という患者さんの言葉と、西出先生（当時院長・故人）からの「私たちと一緒に仕事をしませんか」という誘いに、「名門かどうかは関係ない。必要とされている場所があってこそ自分も幸せになれる。ここが自分の居場所だ」と感じたという。ワシントン行きを取りやめ、その後10年間、わずか40床の家族のように温かい病院で癌治療に携わることになった。

「人生は決断の連続であり、その積み重ねが今の自分を作っている。ただ目の前にある自分がやるべきことをやってきただけ」そう話すオスタペンコ医師が「自分がどこまでできるか挑戦したい」ことができたという。2008年のことだ。ハイパーサーミア学会の指導教育者免許を取得し日本代表として講演することもしばしばあったが、日本の医師免許を持っていないため、臨床の現場では抗がん剤はおろか風邪薬さえも処方できずにいた彼女に、当時勤務していた東京ピオセラクリニックの谷川啓司院長は「あなたに日本の医師免許がないのはおかしい!」と言ったという。その言葉に背中を押され、そして何より、自ら患者さんを治療したいという気持ちが強くなり、日本での医師国家試験の受験を決意した。



▲緑の下の方持ち、地域医療連携室の仲間と。
「みんないつもありがとうー!」



◀息さんが5歳の時に書いたメモ裏の絵。捨てられず、今も手帳に挟んで持ち歩いている。

医師国家試験受験とマッチング

外国人医師が国試受験をするためには、厳しい書類審査と長期間の日本語診療能力調査に合格しなければならない。彼女が受験資格を得たのは11月のこと。2カ月間の猛勉強で国試に挑んだが、不合格だった。

再受験に向けて日本の受験生の勉強法をリサーチし、そこで初めて予備校や「year note」などの存在を知ったという。自分のスタートラインがわかると今度は受験日までの「クリティカルパス（工程表）」を作り、学習進度を徹底的に管理した。TECOMのネット講座も知った。「三苦先生がどの板書でチョークを折ったか、どのように粉が飛び散ったか、いつ風邪声だったか、すっかり覚えてしまうくらい見ました」仕事が休みの日は朝9時から夜9時までの猛勉強。恩師の葬儀にも行かず勉強時間にあてたが、「合格したこと、今の自分があることが恩返しだと考えています」と当時を振り返りつつ、「ウクライナ人が異国で自分の息子と同年齢の受験生と一緒に国試に挑戦し、自分の限界に挑むことができる。神様からこんなチャンスを与えられるって、なかなかないことよ。不安よりも期待と希望で気持ちが高まりました」と目を輝かせながら語ってくれた。

国試の勉強と同時にマッチングにも臨み、レジナビで東大和病院と出会った。「東大和病院はとても明るくバリバリ仕事ができる印象で、外国人である私にも積極的に接してくれたのでどんな人にも働き



◀「早期から発見できる内視鏡に興味を持ったのは、今から考えれば当然の事でした。消化器内科として癌の早期発見から緩和医療まで、自分の患者さんを最期まで診る事が出来ることにとても魅力を感じました。初期研修、後期研修が終わった現在でも消化器科で緩和医療を続けたいという気持ちに変わりはありません」と語る。

やすい病院だと思いました。自分を採用してくれて感謝しています」そして2011年3月の合格発表。母国での研修修了から23年後、再び初期研修医になった。

日本の医師となった今、そしてこれから

後期研修が終わった現在、消化器内科医として緩和医療を続けたいという想いはますます強くなっているようだ。ハイパーサーミアで多くの消化器系終末期癌治療に携わってきた経験から、癌の早期発見から緩和医療までを一貫して診ることが出来る消化器内科に彼女が魅力を感じたのは必然だったのだろう。

臨床医として過ごす日々について、「自分にはできないことがこんなにあるのかと毎日気付かされるし、決して楽な仕事ではない。でも…」と続ける。「人間得意なことばかりやっているとバランスを崩すでしょう。だから、苦手なことやできないこともやって、垢を落とさないと」と笑顔で語った。

初期研修医になってから参加したハイパーサーミア学会で、京都大学名誉教授の阿部光幸先生に「どうしてそんなことができたんだ？」と驚きとともに尋ねられ、「自分の限界を知りたかったから」と答え

たオスタペンコ医師。それに対する阿部先生の「あなたの限界は、そこではなかったのですね」という優しい言葉は、どんな勲章よりも嬉しく、心を癒したという。

そんな彼女は今、新たな挑戦を見据えている。日本で緩和医療に長く携わっているうちに芽生えたその目標は、より日本の文化に合った、日本人の感覚に寄り添う緩和ケアができる施設を築きたいというものだ。いつまでもチャレンジャーとして前に進み続けるオスタペンコ医師の姿に、勇気付けられる人も少なくないのではないだろうか。

